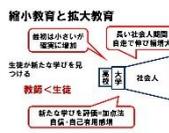
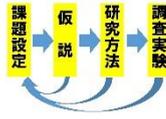






このような文章でまとめることを想定して研究計画を立てる

調査・研究を行っていくうちに生じる新たな問いやあらたな気づきによって何回も繰り返しループしながら進んでいく



「問い」と「対話」の重要性  
問わなければ考えられず  
語らなければ形にならず  
聞かなければ語ることは  
できない

問うことを学ばないところでは  
考えることも学べるはずがない

「探究」とは？  
→「入力」した情報を  
「広げたり」「深めたり」して  
「出力」につなげる

追われてやるのは、義務。  
追いかけてやれば、夢。  
やることは同じでも、  
考え次第で苦勞にも楽し  
しみにも変えられる。

「思考の質」は  
「問いの質」によって決  
まる

「思考」の動機と力は  
「自分の問い」であるか  
どうかで決まる

自分は何に惹かれ、何に興味があり、自分の中心にあるものは何か？

自分のことを良く知ることによって自分の「問い」が生まれる

新たな気づきによって自分の枠を広げていく「探究的な学び」を身につけると最初は持っている知識や技能は少ないけれど、時間が経つにつれてどんどん拡大していく

それに対して、教師から知識を受け取る受動的な学びでは、最初に効率よく多くの知識を得ることができるが、自分から広げることが出来ないため、時間が経つにつれて先細りする。

問うことの重要性を理解する

探究とは「入力」した情報を拡大・収束しながら「出力」につなげる

自ら主体的に動く意味を理解する

「考える」ためには自分の問いが必要。自分の問いがなければ、考えることはできない。与えられた問題を解くのは考えさせられているだけで、自分でかんがえているわけではない。

与えられた問題に答える力は「考えさせられる力」  
「自分の問い」がなければ「考える力」を育てていくことはできない  
学校は「考えないこと」を教えている

考えを言語化したり、他者に語ることで自分にとって「明確なもの」になる

「受け入れる」ではなく「受け止める」  
「理解する」ではなく「受け止める」  
聞く一場を共有し存在を受け止める

これまでの授業「自分の考え」は言わなくても良い  
一言って良いのは「正解」授業の意図に沿うこと

俺とおまえは意見が違うだからお互いに存在価値があるんだ。

言語化して、他者と語ることで自分が明確になる

他者との語りがないければ、自分だけでは何も理解できない

正答も誤答もないという観点では、これまでの授業とは異なる点に留意する

多様であることの意義を学ぶ

振り返ってみると、この世の中に「絶対的な正解」など存在しないのではないかという感覚が身に付く

→ すべての事象や意味は、ある条件やある関係の中のみで成り立つこと

「同じ」であることと「違う」ことの意味をあらためて考えてみる